

# 187

こんにちは。塾長の大井です。

国語の指導についての最終回です。

物事を頭だけではなく心で感じる感受性。

自分のことだけでなく他者を思いやる共感力。

それでは、この感覚をどう養っていったらいいのでしょうか。

計算や漢字のように問題を解きまくる、数をこなすというやり方は  
通用しません。

原理を理解して頭でつなげるというわけにもいきません。

それが国語という科目の特異性、独自性です。

ご存知の通り、心を育てることに近道はありません。

たった一つできることは、子どもに心を注ぎ続けることだけです。

がんばった時思いきり褒める、心ないことをした時本気で叱る、い  
ろんなことを共にする。

そういった誰にもできそうで、その実やり切っていない小さな一つ

一つを、義務や task ではなく、情熱を持ってやり続けることです。

以下は決して自慢ではなく客観的な事実です。

田宮が「大井先生はどんなレベルの子でも難関中のレベルに仕上げるよね！

算数ではどうしてもあるレベルで差が生まれてしまうけど。」

としばしば言います。

(私からすれば田宮の算数の引き上げる力も紛れもなく一流ですが。)

大手進学塾の上司にも「大井さんの生徒はみんな答案で分かるよね。温度がまるで違う。」と言われました。

それは独自の技術によるものでありますが、それ以上に私が彼らを自分の子のように心を注いだ結果だと感じています。

ですから、国語を育てることは、子どもたちの人間を育てることに他ならないのです。

ご家庭でも、たくさん心を注いであげてください。

言うまでもなく、公平ではないいたずらな叱責は論外です。

同時に、過分におだてたり甘やかしたりすることも大変危険です。  
彼らを砂糖を舐めさせてくれなければがんばれないという、  
いわば「心の虫歯」にしてしまうことは教育における現代病と言え  
るかもしれません。  
何かにひたむきになることで、その子にしかない価値を共に見つけ、  
認めてやる。  
そうやって本当の意味で自分を大切にすることを伝えて頂きたいと  
願っています。

私の教え子たちは、どんなにギリギリで受かった子も、中学高校に  
大切に通り、その学校のトップレベルに成長していくことが多いで  
す。

それはきっと、あの本気の日々を大切にしたい。あの努力の延長に  
今の自分がある。

そんな TOPism を体感し、今も彼らの中にそれが息づいているから  
だと思います。

そんな無限の種を TOP で植え続けていけたら、国語という科目を超

えた教師冥利に尽きますね。

2018年6月11日